「弟子たちに渡しては群衆に配らせた」

キリストの聖体・C年（16.5.29）

あなたがたが彼らの食べ物を与えなさい

早速、今日の福音のメッセージを、皆さんとご一緒に探って行きましょう。
まず、福音記者ルカが、今日の朗読箇所をその福音のどの文脈に挿入しているかを、見て見ましょう。それは、９章で十二使徒たちに**「あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能とお授けになり、神の国を宣べ伝え、病人をいやすために遣わす」**（ルカ 9.1-2）場面に続く箇所であります。

ですから、今日の福音は、十二使徒団を派遣した延長線上にある出来事を、伝えていると言えましょう。

したがって、10 節で、**「使徒たちは帰ってきて、自分たちの行ったことをみなイエスに告げた。イエスは彼らを連れ、自分たちだけでベトサイダという町に退かれた。群衆はそのことを知ってイエスの後を追った。」**と今日の場面の文脈をさらに説明しているのであります。

そこで今日の個所の冒頭で、弟子たちがイエスに次のような極めて合理的な提案をするのであります。**「群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう。わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです。」**

ところが、イエスは全く予期しない命令を下されます。

「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」と。

確かに、十二使徒の派遣に当たって、**「神の国を宣べ伝え、病人をいやす」**ことは、命じられましたが、群集の食べ物の世話などは、全く想定外であります。

ですから、弟子たちは極めて常識的な返事しかできませんでした。

「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません。このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買いに行かない限り。」と。

とにかく、五千人以上の群衆に対してイエスの全く無理な提案にほかなりませんでした。

けれども、イエスが神から遣わされたメシア（同上 9.20 参照）であることを、知らせるためにぜひとも実現させなければならい奇跡を行う絶好のチャンスだったのではないでしょうか。

ですから、イエスは、早速弟子たちに命じられます。**「人々を五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい。」**と、そこに集まっていたいわば烏合（うごう）の衆である群衆を、お互いを配慮でき

る共同体になって欲しかったからでしょうか。

そこで、イエスは、たった**「五つのパンの二匹の魚を取り、天を仰いで、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。」**のであります。何とミサを思わせる仕種(しぐさ)ではないでしょうか。

しかも、ここで注目すべきはイエスがなさったパンの分配の仕方であります。つまり、**「裂いて弟子たちに渡しては配らせ」**と、まさに、与え続けられたというイエスの力の豊かさが示された奇跡にほかなりません。

つまり、イエスの行われた奇跡はすべて神の国の到来の具体的なあかしだとするなら、神の国の恵みの溢れを見事に象徴する出来事だったと言えるのではないでしょうか。

礼拝共同体がささげるミサ

ですから、今日のこの奇跡を、あえてミサに結びつけるならば、わたしたちはミサを捧げる度毎に、神の国の到来をあかしすることができることにほかなりません。

しかも、ミサは、あくまでも共同体がイエスと共にささげる最高の感謝の祭儀なのであります。

したがって、今日の第二朗読が伝えるミサの制定を、あらためて確認しなければなりません。

実は、今日の個所の前の段落で、コリントの共同体の問題点をパウロは、次のように指摘しているのであります。

「あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いているからです。まず、第一に、あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがあると聞いています。わたしもある程度そういうことがあろうかと思います。あなたがたの間で、だれが適格者かはっきりさせるためには、仲間争いも避けられないかもしれません。それでは、一緒に集まっても、主の晩さんを食べることにはならないのです。」

とにかく、パウロは、ミサをささげるためには、まず、共同体をしっかり育てなければならないと強調しているのであります。ですから、若し、分裂し、あるいは仲たがいしているならば、まさに、ミサを捧げる資格はないことになるのであります。なぜなら、ミサこそ教会の一致の秘跡だからであります。

ですから、教皇聖ヨハネ・パウロ二世は、その回勅で次のように強調しておられます。

「交わりの儀（聖体拝領）は、キリストのからだである教会が一致するよう力づけます。聖パウロは、感謝の祭儀の会食にあずかることによって得られるこの一致をもたらす力について、コリントの信徒に向けてこう語っています。『わたしたちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大

勢でも一つのからだです。皆が一つのパンを分けて食べるからです』（一コリント 10.16-17）聖ヨハネ・クリゾストモのこの箇所の注解は、深く洞察に富んでいます。『パンとは何でしょうか。キリストのからだです。そして、それを受ける人は何になるのでしょうか。キリストのからだになるのです。それも多くのからだではなく、一つのからだになるのです。多くの小麦の粒（つぶ）からつくられていても、パンは全く一つですし、また、たとえ目には見えなくても、これらの小麦の粒（つぶ）は残っています。・・・』（『教会にいのちを与えるエウカリスティア』23 項）

ですから、「聖体拝領」という用語は、一致の秘跡であるエウカリスティアを十分に表わしていないのではないでしょうか。つまり、お互いの交わりと一致を示すには舌足らずと言えましょう。ですから、典礼改革によって「交わりの儀」と言い改めたのであります。

このような視点で、今日の奇跡を振り返るとき、たった五つのパンと二匹の魚が、五千人以上の烏合の衆を、まさに共同体として交わり、一致させたと出来事と言えるのではないでしょうか。

ですから、「キリストの聖体」の祭日の意義も、共同体の一致と交わりの視点で受け止めることができると言えましょう。

したがって、これから派遣されて行くそれぞれの家庭、職場、地域において一致と交わりの福音を伝えることが出来るよう共に祈りましょう。